

第1課 文字と発音

1 ギリシャ・アルファベット

古典ギリシャ語を記すのに使うアルファベットは、次ページの24種類です。それぞれに大文字と小文字がありますが、大文字は固有名詞の語頭やパラグラフのはじめ以外ではあまり使いませんから、まずは小文字を中心に慣れていくのがよいでしょう。文字の形を真似して、何度か書いてみてください。「書き順」は書きやすいように書けば大丈夫です。260ページの付録1も参考になると思います。

それぞれの文字には名称と音価（発音）が定まっています。たとえばリストの始めにある α は「アルファ」という名称の文字で、[a] または [a:] という音価を持ちます。文字の名称と音価が対応していて、「アルファ」だから「ア」または「アー」と発音すると捉えておいてください。同様に β は「ベータ」だから [b] と発音し、 γ は「ガンマ」だから [g] と発音する……という要領で進みますが、ところどころ悩ましいものもあります。そこで以下では、古典ギリシャ語の文字と発音を、ひとつひとつ確認していくことにします。次ページのリストはまとめとして使ってください。

2 母音の組織

短母音と長母音

母音で大切なのは、短母音（短く発音する母音）と長母音（長く伸ばして発音する母音）を区別することです。以下の表を見てください。

短母音	α [a]	ε [e]	ι [i]	o [o]	υ [y]
長母音	$\bar{\alpha}$ [a:]	η [ɛ:]	$\bar{\iota}$ [i:]	ω [ɔ:]	$\bar{\upsilon}$ [y:]

まずは短母音ですが、左から順に「ア」「エ」「イ」「オ」「ユ」と読んでください。最後の υ [y] は、正確には「唇を丸めてウの形にし、口のなかでイと発音する」ときの音ですが、本書では便宜的に「ユ」で示すことにします。「ウ」とは読まないことがポイントです。

● アルファベット (Greek Alphabet) [一覧表]

大文字	小文字	名称 ¹	音価（古典期のもの） ²
A	α	アルファ	[a] または [a:]
B	β	ベータ	[b]
Γ	γ	ガンマ	[g] または [ŋ]
Δ	δ	デルタ	[d]
E	ε	エ・プシーロン	[e]
Z	ζ	ゼータ	[zd] 英語 wisdom の sd
H	η	エータ	[ɛ:]
Θ	θ	テータ（シータ）	[tʰ]
I	ι	イオータ	[i] または [i:]
K	κ	カッパ	[k]
Λ	λ	ラムダ	[l]
M	μ	ミュー	[m]
N	ν	ニュー	[n]
Ξ	ξ	クシー	[ks] 英語の x に相当
O	o	オ・ミークロン	[o]
Π	π	ピー（パイ）	[p]
P	ρ	ロー	[r] 巻き舌で発音する
Σ	σ / ς	シーグマ	[s] または [z]
T	τ	タウ	[t]
Υ	υ	ユー・プシーロン	[y] または [y:] ドイツ語 ü の音
Φ	ϕ	フィー（ファイ）	[pʰ]
X	χ	キー（カイ）	[kʰ]
Ψ	ψ	プシー	[ps]
Ω	ω	オー・メガ	[ɔ:]

注1 名称は慣用的な呼び名を優先しています。

注2 「古典期」とは前5-4世紀のこと。この時期にアテーナイ（現在のアテネ）を中心とする地域で使われていたギリシャ語を「古典ギリシャ語」といいます。

続いて長母音を確認します。これも左から順に「アー」「エー」「イー」「オー」「ユー」と読んでいってください。これらのうち $\bar{\alpha}$ / $\bar{\iota}$ / $\bar{\upsilon}$ では、文字の上にある横線（マクロン）が長母音であることを示します。この記号はじつは補助的なもので、実際のギリシャ語原文では書かれないのですが、教科書や辞書などではないと困る（母音の長短が分からない）ので、

本書では一貫してこの記号を使います。マクロンが付いていたら長く伸ばして読むようにしてください。

η / ω は短母音とは異なる文字を使い、ā / ī / ū とは長母音の表し方が違うので注意してください。また発音記号を見るとそれぞれ [ɛ:] [ɔ:] となっていて、短母音 ([e] [o]) とは異なる記号が使われています。これは [e] や [o] よりも口のなかを広く空けて発音する音を示しますが、カタカナでは区別が難しいので、本書では正確な区別にはこだわらずに、η を「エー」、ω を「オー」と記すことにします。

二重母音

母音でもうひとつ大切なのが二重母音です。二重母音とは「2文字をまとめて発音する母音」（分けて発音することができない）のことで、基本的には以下の11の組み合わせがあります。それぞれの母音を単独で読む場合とは異なる発音になるものもあるので、注意して学んでください。

αι [ai]	āι [a:i]	αυ [au]
ει [ei]	ηι [ɛ:i]	ευ [eu]
οι [oi]	ωι [ɔ:i]	ηυ [ɛ:u]
υι [yi]		ου [u:]

まずは左端の αι / ει / οι / υι を確認します。それぞれ短母音 [a] [e] [o] [y] に [i] の音を添えるようにして、「アイ」「エイ」「オイ」「ユイ」と発音してください。ει については日本語で「先生 sensei」を「センセイ」と発音するように [e:] と発音するともいわれますが、本書では長母音 η との区別のために「エイ」と記すことにします。

次に真中の āι / ηι / ωι ですが、これらはいずれも長母音 [a:] [ɛ:] [ɔ:] に短母音 [i] を添えて、「アーイ」「エーイ」「オーイ」と発音します。これらは α / η / φ と書かれることもあり、このとき文字の下にまわった ι (ゴミではありません) を「下書きのイオータ」と呼びます。この書き方の場合でも、古典ギリシャ語の発音としては ι を無視せずに、「アーイ」「エーイ」「オーイ」と読むのがよいでしょう。

最後に右端の αυ / ευ / ηυ / ου を確認します。これらのうち αυ / ευ / ηυ はそれぞれ「アウ」「エウ」「エーウ」で、υ の文字を「ウ」と読むことが

ポイントです。先ほど見たように υ は単独では「ユ」と読み、二重母音でも υι の場合には「ユイ」でしたが、αυ / ευ / ηυ のように二重母音の後半に現われるときには「ウ」と読むので要注意です。ου を「ウー」と読むのも特別なので、気をつけて覚えておいてください。

3 子音の組織

子音の基本①：閉鎖音

子音は母音と組み合わせて発音する音で、この組み合わせで音節（発音上の最小単位）を形成します。そのため子音単独で発音するのは難しいのですが、ここでは子音だけを取り出して音価を確認しておきます。まずは閉鎖音と呼ばれる子音から見ていきましょう。

	無声音	有声音	帯気音
唇音	π [p]	β [b]	φ [p ^h]
歯音	τ [t]	δ [d]	θ [t ^h]
軟口蓋音	κ [k]	γ [g]	χ [k ^h]

これらはすべて、外に出ていく息の流れを一度ストップして、それを解放することで生まれる子音（そのため閉鎖音と呼ばれる）です。まずは**無声音**と**有声音**を確認しましょう。唇音の場合には唇で息の流れをストップして、それを解放しながら π は「プ」のような発音、β は「ブ」のような発音（正確には [pu] [bu] のうち [p] [b] にあたる音）になります。

歯音の場合には上の前歯の付根に舌先を当てて、そこで一瞬だけ息の流れをストップし、それを解放することで発音します。τ なら「トゥ」、δ なら「ドゥ」という感じ（正確には [tu] [du] の [t] [d] にあたる音）です。ぜひ口を動かして確認するようにしてください。

軟口蓋音は、口腔内奥の天井部分（喉の真上あたり）に舌の付根を近づけて、息の流れを狭めることで発音します。唇音や歯音に比べて説明しにくいのですが、κ なら「ク」、γ なら「グ」のように発音する際、舌の付根がどのように動いているか、あるいは口腔内のどこにストレスがかかっているか（その場所が軟口蓋です）を確認するとよいと思います。

さて、少し厄介なのが**帯気音** φ / θ / χ です。これらは、だいたい「プ」「トゥ」「ク」という発音で、先ほどの π / τ / κ とよく似ていますが、発音

第3課 動詞の基本

1 動詞の活用（現在形）

この課では古典ギリシャ語の動詞について基本的なことを学びます。今後の学習の前提となる大切な考え方を学びますから、しっかり理解するように努めてください。

ギリシャ語の動詞は、**主語の人称と数**に応じて形を変えます。人称には英語などと同じく**1人称**、**2人称**、**3人称**があり、数には**単数**と**複数**のほかに、「2つ」であることを特別に示す**双数**（または**両数**）があります。双数は古典ギリシャ語の時代にはあまり使われなくなっていたので、本書ではひとまずこれを省略して学び、261ページで概要のみ示します。

さて、動詞の語形変化（活用という）を見てみましょう。たとえば「...を止める」を意味する **παύω** の現在形は、以下のように変化します。

	単数	複数
1人称	παύω	παύομεν
2人称	παύεις	παύετε
3人称	παύει	παύουσι(v)

単数は上から順にパウオー、パウエイ^ス、パウエイと発音します（二重母音 **αω** をほかよりも高く読む）。**παυ-**の部分は変化せず、語尾が **-ω**、**-εις**、**-ει** と変わっていることに注目してください。複数はパウオ^{メン}、パウエ^テ、パウウーシ(ン)で、やはり語尾だけが **-ομεν**、**-ετε**、**-ουσι(v)** と変わります。3人称の最後に括弧付きの **v** がありますが、これは**脱着可能な v** で、状況に応じて付く場合と付かない場合があります。基本的に**句読点や母音の前では付く**と覚えておいてください。

この変化表をもう少し観察しておきましょう。まずは全体を眺めて、すべての語形が（綴りも発音も）明確に区別されていることを確認してください。つまり **παύω** という形は主語が1人称・単数のときにだけ使い、この形を見れば主語が「私」だと特定できる仕組みになっています。そのため以下のように、**1人称と2人称の場合には主語を明示する語**（英語の I

など）**を書く必要がありません**。動詞だけで主語を示せるのです。

παύω. 私は止める。 παύομεν. 私たちは止める。
παύεις. あなたは止める。 παύετε. あなたたちは止める。

3人称の場合にも、文脈から主語が明らかならば、主語（英語の He など）を明示せずに、**παύει** だけで「彼は／彼女は／それは止める」の意味になります。しかし3人称では、主語を具体的に示さないと状況が分からないことがあります。そういうときには、**Σοκράτης παύει**。「ソークラテースは止める」のように主語を明示して表現します。

2 ω 動詞と μι 動詞

動詞には大きく分けて、**ω 動詞**と**μι 動詞**という2つのタイプがあります。ω 動詞は、先ほどの **παύω** のように**1人称・単数が -ω で終わる動詞**のことで、ほかにも **ἀκούω**（聞く）や **λέγω**（語る）などがあります（発音は **アクー**オーと **レゴ**ー）。活用のパターンは **παύω** と同様で、**ἀκούω** なら **ἀκούω**、**ἀκούεις**、**ἀκούει**、**ἀκούομεν**、**ἀκούετε**、**ἀκούουσι(v)**、**λέγω** なら **λέγω**、**λέγεις**、**λέγει**、**λέγομεν**、**λέγετε**、**λέγουσι(v)** と活用します。語尾の変化を確認しながら、書いたり発音したりして練習してください。

もうひとつの **μι 動詞**は、やはり**1人称・単数**の語形に注目して、それが**-μι で終わる動詞**のことです。**δίδωμι**（与える）や **τίθημι**（置く）などの重要語（発音は順に **ディ**ドーミ、**ティ**テーミ）が多いのですが、これらは ω 動詞とは異なる活用をするので、後ほど学ぶことにします。

[辞書での表記]

古典ギリシャ語の辞書には、1人称・単数の語形を動詞の見出し語にするという習慣があります。そのため、たとえば **παύεις** を辞書で引くには、語尾の **-εις** を **-ω** に変えて **παύω** の語形で検索することになります。これをスムーズに行なうには、変化表への習熟が不可欠です。頑張ってください。

3 現在形の示す意味

現在形は基本的に「**(繰り返し) ...する**」「**(習慣的に) ...している**」な

どの反復的な意味合いや、「(今まさに) ...している/しようとしている」などの進行的な意味合いを示します。たとえば τὸν ὕμνον ἀκούω。(トン・ヒュムノン・アクーオー) という文は「その歌を (τὸν ὕμνον) 私は繰り返し聞く/習慣的に聞いている/今まさに聞いている」などの意味を示します。どの意味で解釈するかは、文脈と相談したり状況をイメージしたりしながら決めてください。もう少し例文を見ておきましょう。

(1) ταῦτα πολλάκις λέγεις.

あなたはよくそれらのことを語る。[反復的]

* ταῦτα それらのこと πολλάκις よく (often) λέγω 語る

(2) πρὸς τὸ ἄστυ βαίνομεν.

私たちはその町へ向かって進んでいる。[進行的]

* πρὸς ...へ向かって τὸ ἄστυ その町 βαίνω 進む

(3) τὸ θηρίον ἀποκτείνει.

彼はその獣を殺そうとしている。[進行的]

* τὸ θηρίον その獣 ἀποκτείνω 殺す

例文を読む準備として、まず発音を確認しましょう。例文(1)はタウタ・ポッラキス・レゲイス、例文(2)はプロス・ト・アステュ・バイノメン、例文(3)はト・テーリオン・アポクテイネイと読みます。

そのうえで意味をとりますが、その際、**最初に述語動詞に注目する**ようにしてください。ギリシャ語に限らずヨーロッパ言語全般にいえることですが、文は述語動詞(人称と数を備えた動詞のこと)を中心に組み立てられるため、その中心を押さえることが解釈の出発点になるのです。

例文(1)では λέγεις が2人称・単数なので、まず「あなたは語る」と意味をとり、そこに ταῦτα と πολλάκις を繋げます。このように考えていけば、ταῦτα を λέγεις の目的語として(「それらのことを語る」の意味で)読めるでしょう。例文(2)も βαίνομεν が1人称・複数であることを確認して「私たちは進む」と読んでから、πρὸς τὸ ἄστυ (この3語で前置詞句です) を関係させます。例文(3)は ἀποκτείνει が3人称・単数なので文脈なしでは「彼は」か「彼女は」か分かりませんが、とりあえず「彼は」

としておき、それに τὸ θηρίον を繋げます。もちろん「彼女は」としてもOKです。

このような要領で文全体のおおまかな意味を捉えたら、反復的なのか進行的なのかといった意味合いを判断します。例文に付した訳で確認してください。なお、これらの例文から分かるように、ギリシャ語では**述語動詞が文末に来る**のが基本的な語順です。英語などとは違うのではじめは戸惑うかもしれませんが、少しずつ慣れていってください。

4 不定詞(現在不定詞)

παύω の語尾を -ειν に変えて παύειν (パウエイン) にすると、現在形に対応する不定詞(現在不定詞)の語形になります。古典ギリシャ語において**不定詞は「...すること」という意味を示す**のが基本です。これについても例文を見ておきましょう。

(4) τὸν ὕμνον ἀκούειν ἐθέλω.

私はその歌を聞くことを望む。(その歌を聞きたい)

* τὸν ὕμνον その歌 ἀκούω 聞く ἐθέλω 望む、欲する

(5) τὸν ὕμνον ἀκούειν μοι ἀρέσκει.

その歌を聞くことは私を喜ばせる。

* μοι 私 ἀρέσκω 喜ばせる

発音は、例文(4)がトン・ヒュムノン・アクーエイン・エテローで、例文(5)がトン・ヒュムノン・アクーエイン・モイ・アレスケイです。ともに不定詞句 τὸν ὕμνον ἀκούειν が「その歌を聞くこと」という名詞的な意味になっていることがポイントで、その不定詞句が(4)では述語動詞 ἐθέλω (私は望む) の目的語として、(5)では μοι ἀρέσκει (私を喜ばせる) の主語として機能しています。「...すること」は意味的に1人称でも2人称でもなく、さらには複数でもありませんから、例文(5)のようにそれを主語にする場合には、述語動詞は3人称・単数の語形 (ἀρέσκει) で対応させます。

第4課 名詞の基本と第二変化名詞

1 名詞の性と格

第3課で動詞について学んだので、この課では名詞の基本を学ぶことにします。ギリシャ語の名詞には単語ごとに性別があり、**男性名詞**、**女性名詞**、**中性名詞**に区分されます。たとえば「父」を意味する *πατήρ* (パテール) は男性名詞に分類され、それに対して「母」を意味する *μήτηρ* (メテール) は女性名詞に、「星」を意味する *ἄστρον* (アストロン) は中性名詞に分類されます。

このような区別のことを名詞の**性** (gender) というのですが、その区分は必ずしも「父」や「母」といった意味に応じて決まるとは限りません。たとえば「河」を意味する *ποταμός* (ポタモス) は男性で、「調和」を意味する *ἁρμονία* (ハルモニア) は女性、「子供」を意味する *παιδίον* (パイディオン) は中性です。これらについて、なぜ「河」が男性で「調和」が女性なのかとか、「子供」には男の子と女の子がいるじゃないかとか、いろいろ考えてみたくもなるのですが、そのような疑問はひとまず脇に置いておくのがよいでしょう。**名詞の性は意味とは関係なく定まることがある**と捉えておいてください。

もうひとつ大切なのが**格**という考え方です。たとえば「馬」を意味する名詞 *ἵππος* (ヒッポス) は、文中で「その馬**は**」を意味するときにはこの形ですが、「その馬**を**」の意味になると *ἵππον* (ヒッポン)、「その馬**の**」なら *ἵππου* (ヒッピー)、「その馬**に**」なら *ἵππῳ* (ヒッポイー) というように語形が変わっていきます。日本語の助詞が「は」「を」「の」「に」と変わるのに対応して、ギリシャ語の語尾が *-ος*、*-ον*、*-ου*、*-ῳ* と変化していることを確認してください。日本語は文中での名詞の働き（主語なのか目的語なのかなど）を助詞（格助詞）で示しますが、**ギリシャ語ではその働きが名詞の語尾によって示される**のです。このとき主語や目的語といった文中での働きのことを格といい、それに応じた語形変化 (*ἵππος*、*ἵππον*、*ἵππου*、*ἵππῳ*) のことを一般に**格変化**（正確には**曲用**）といいます。

名詞を学ぶとき、綴りと発音、そして意味との対応を覚えることはもち

練習問題 3-1 *παύω* の活用 (18 ページ) を参考にして、次に挙げる各動詞の現在形の変化 (活用) を確認してください。何でもよいので練習用の紙を用意して、変化形を順に書いてみましょう。必ずしもきれいな表にする必要はありません。

1. λέγω (レゴ) 語る
2. ἀκούω (アクーオー) 聞く
3. γράφω (グラポー) 書く
4. βαίνω (バイノー) 進む

練習問題 3-2 次に挙げる各語形に対して、辞書の見出し語形 (1 人称・単数の語形) を答えてください。これが辞書で動詞を調べるための練習になります。

1. ἔχει (エケイ)
2. φέρομεν (ペロメン)
3. βάλλουσι (バツルーシ)
4. λείπεις (レイペイス)
5. πέμπετε (ペンペテ)
6. λαμβάνειν (ランバネイン)

練習問題 3-3 次に挙げる各文について、発音を確認したうえで意味を答えてください (訳してください)。まずは動詞の語尾に注目して、主語を正確に捉えることが大切です。そのうえで余裕があれば、反復的や進行的などのニュアンスを考えてみるとよいでしょう。必要な単語は問題文の下に載せておきます。

1. τὸν ὕμνον ἀεὶ ἀκούομεν.
2. τὸν ὕμνον ἀεὶ ἀκούετε.
3. τὴν ἐπιστολὴν νῦν γράφει.
4. Ἴρα τὴν ἐπιστολὴν νῦν γράφεις; (疑問文)

* τὸν ὕμνον その歌を ἀεὶ [ā] いつも (always) ἀκούω 聞く
τὴν ἐπιστολὴν その手紙を νῦν いま (now) γράφω 書く
Ἴρα 疑問文の目印